

他力

― 住職便り ―



第34号（令和六年九月）

専徳寺住職 弘中満雄

【聖人の眼】

数年前の春のお彼岸でした。夕方に門をしめて親鸞聖人の銅像を眺めていました。

本堂の向かい側に立つ親鸞聖人。しかし正面ではなく、少し左を向いています。

「なぜ本堂を向いていないのだろう。」

突然ひらめいて「コンパス（羅針盤）」

で調べました。すると聖人が向いている方向は真西でした。

沈みゆく太陽をま

っすぐ見つめておら

れる親鸞聖人。非常

に感動しました。

【仏説】

今月の子供会はお

彼岸にちなみ、

『仏説阿弥陀経』のお話をしました。

「ここから西方にずーっといくと極楽という国があります。」

するとすぐに五年生のS君が、

「そんなのウソだ！」

……正直な子です。お陰

でその日は少し長話をして

しまいました（苦笑）

お経のタイトルは必ず「仏説く経」。

「人説（人が説く）」ではありません。

人間が説く真理は物理や科学です。

それに対して、人の苦しみを取り除き

たい仏さまは、私の心理や行為について

話をされつつ、真実の法を説かれます。



ですからおのずと意味が異なります。

世間で「燃える」といえば火事の話。

お経で「燃える」とあるのは私の欲望・

怒りが他を焼き尽くす事を意味します。

また「国」や「世界」といっても国家

や宇宙ではなく、心の領域の話です。

【ここと西方】

「ここより西方に十億の仏土を

過ぎて世界あり。名けて極楽という。

その上に仏まします。阿弥陀と号す。」

（仏説阿弥陀経）

「ここ」とは、他ならぬ私の現実です。

欲・怒り・愚痴。そんな煩惱うずま

く境界から出られず、生まれ変わり死

に変わり、今もぐるぐる迷い続けています。

「西方」も単なる地理の話ではありません。

「地球は丸いからまっすぐ西方に

すすむといずれ元の場所に戻ってくる」

という理屈に用事はありません。

苦悩の人生の進むべき道、

羅針盤を意味します。迷いの

凡夫の私を導く言葉です。

【お彼岸】

太陽が真西に沈む秋分の日。

人生もいずれ太陽のように沈みゆく日

がきます。しかしその沈む先にあるのが、

今ここに迷いの私と共におられる阿弥陀

さま、そのさとの世界「お浄土」です。

親鸞聖人の像と同様、まっすぐに西方

を見つめつつ、お念仏一筋の人生を喜ば

せていただくお彼岸です。（おわり）

